

第17回学習会を、平成21年12月4日(金)19:00～20:00福岡市教育センターにて行いましたので報告いたします。

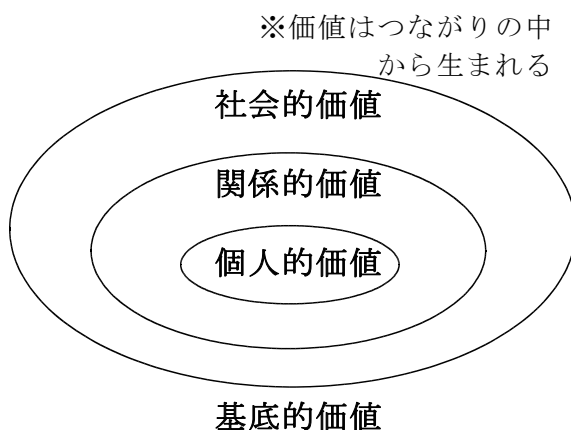
第17回目の内容

講師 重枝一郎先生(千代中学校 指導教諭)

- 1 より深い自己価値感を得られるには
- 2 実践ビデオ紹介
- 3 エクササイズの実験活動

1 より深い自己価値感を得られるには

「自己価値(感)」 ← 「集団体験を促し、相互作用を重視した学びの場」(お好み焼き理論)
= 自信を育てる



コラボレート

- ルールとリレーション
- インプットとアウトプット
- アウタールールとインナールール
- PM理論
- 見えるテストと見えないテスト
- 自己価値感

※「自分が楽しい」ということだけでなく、「友だちが喜ぶ」「先生がほめてくれる」ということを見出した生徒は、「みんなが楽しい」ということを通して「自分も楽しい」という自己価値感をもつことができる。

すなわち、この場合では、関係的価値と個人的価値が結ばれ、より深い価値感が得られる。

※チームが地域・学校から応援されると、広くまわりから受け入れられている感覚(社会的価値)を満たし、チームメイトやコーチとの関係が良好であれば(関係的価値)、達成したい目標を見出すやる気(個人的価値)も向上する。

※「勉強さえできればよい」「サッカーさえできればよい」という大人のは感覚は(本人の感覚でも)生徒を追いつめるだけではなく、他の価値や将来展望とのつながりを見出せない場合には、「勉強」「サッカー」そのものに価値を見出せなくなってしまう。

私たちは重層的価値を認め、そのつながりにおいて新たな価値を見出していく姿勢をもつことが大切

・・・→ 自己理解力・自己肯定感・自己効力感

○関連付け、相互作用を図る

学校は「学級風土」や「学年風土」,「学校風土」をより良く向上させるために,「生徒指導」と「人間関係づくり」のどちらも大切にしたい取組を行う必要があります。これは,「ルール」と「リレーション」をコラボレートするという考え方です。バランスが大切なのです。

教師は,両方を同時に育てるために,系統立てた活動を「仕組む」必要があります。そのための場面を設定するのです。それは,学級活動,道徳,総合的な学習の時間,教科指導のすべての時間を想定して計画します。相互作用を図るのです。「生徒指導」と「人間関係づくり」を同時に行うと,その結果,生徒の「自己価値感」が生まれます。ここでは,「自己価値観」の「観」ではなく,「感じる」の「感」をつかっています。生徒の「自尊感情」や「自己肯定感」「自信」を育てるのです。

生徒の「自己価値感」が育つと「学級風土」や「学年風土」,「学校風土」が高まり,それはまた,生徒の「自己価値感」を高めていくという,好ましい循環が生まれます。この循環がスパイラルに積み上げられると,学校の「風土」として定着するのです。

○教師に必要なバランス感覚

ルールとリレーションにも相互作用があり,そのバランスが大切です。集団の中でルールが守られていると安心感が生まれます。ルールに守られているという安心感があると,自分の本音が言えるというように,リレーションが高まります。このように,どちらかだけではなく,バランスよく両方を同時に育てていくのです。

例えば,生徒集団を見たときに,今日はリレーションがいいなという時には,わざとルールに力を入れるし,生徒の様子がちがち(ルールは徹底しているが固い様子)の時は,本音を言わせるなどリレーションに力を入れるというように,バランス感覚を教師がもち,臨機応変に対応するのです。

授業においても,インプットとアウトプットのバランスが大切です。インプット・インプット・インプットで生徒がおとなしく授業を受けていたとしても,生徒がアウトプットできなければ,学びが深まっているとは言えません。アウトプットする場面をつくってインプットするという発想を教師がもち,場をデザインするのです。例えば,「この後,3人の人に発表してもらおう」と言ってから今日のまとめをすると,生徒のインプットが深くなっていきます。それは,生徒がアウトプットのためのインプットを行っているからです。

○心の中のルール(インナールール)

部活動の指導で教師からきびしいことを言われても,キラキラした目で生徒がついてきたときには,生徒の心の中のルールとして,「この先生の言うことを聴こう」という気持ちが育っているのです。ルールを,強制的なものとして押しつけられていると理解していても,インナールール(心の中のルール)が育っていれば,素直な気持ちで受け入れようと思えるのです。これが,アウタールールとインナールールのコラボレートという考え方です。つまり,インナールールが育つと,アウタールールが守られ,アウタールールを守ることで,インナールールが高まっていくという相互作用です。

○PM理論

Pは「指導面優位」,Mは「援助面優位」のことです。これは,教師にも生徒にもいえるのですが,PとMの両方が大切で,どちらか一方だけではダメです。これも,バランスが重要です。

PMの両方を併せ持った教師のクラスは「満足型」で,いじめの少ないクラスです。Pが強い教師のクラスは,生徒指導が徹底されているので授業規律はきちんと守られていますが,盛り上

がりの少ない授業になることが多いようです。Mの強い教師のクラスは、活気があって盛り上がるのある授業になりますが、授業規律は徹底されていません。つまり、教師はPとMの両方の力を身に付けていく必要があるのです。

また、生徒もクラスの中で、「指導面」と「配慮面」の両方を意識しながら発揮できるように、エクササイズを通して育てていきます。

○見えるテスト・見えないテスト

例えば生徒の場合、「見えるテスト」は定期テストの点数であり、「見えないテスト」は、はっきりと点数化できない「素直さ」や「人間性」などです。学校教育では、その両方を育てることが大切です。教師の場合、生徒にルールを守らせるために一生懸命指導している姿など、先輩教師の見ている場での指導は「見えるテスト」として評価されますが、誰も見ていないところで生徒をこっそり呼んで「最近元気ないけど、どうした？」と指導する場合は、人から評価されることはありません。これは、「見えないテスト」です。しかし、そのどちらも大切です。教師に信念や教育哲学があれば、「見えるテスト」を意識した指導だけではなく、「見えないテスト」も大切にしたい教育を行うことができます。

○重層的価値を認めて、育てる

「基底的価値」とは、この世に生まれてきた人はみんな大切という、その他の価値の根底にある価値観です。「関係的価値」は、「みんなの喜び」が「自分の喜び」になるので、より深い満足感を得ることができます。例えば、個人的価値だけであれば、「何のために勉強をしていたのか？」「何のためにサッカーをしていたのか？」という考えに陥った時に、生徒は追いつめられ「勉強」や「サッカー」に価値を見出せなくなってしまいます。しかし、「関係的価値」や「社会的価値」とつながっていれば、つまり「自分が役立っている」という自己価値感が深まっていけば、「個人的価値」も向上するという相互作用が生まれます。重層的価値を同時に育てるという発想が、重要なのです。

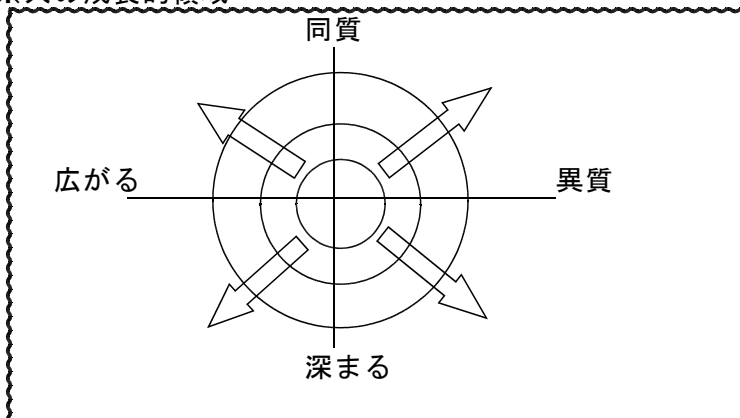
「規範の内面化」

「他人の迷惑にならないように（しつけ）」→人とのかかわりを避ける風潮

人間関係が希薄になり、葛藤を処理したり他者との関係を調整する力も育たなくなる

人とのかかわりを避けて生きていくことはできない
自分では意識していなくても他者の世話になっている
だから・・・迷惑をかけないというより、迷惑をかけていることを意識して、お互様の中で助け合ったり、協力することが肝心

※人の成長的領域



- ・ 班づくりのときの生徒にこの意識をもたせる
- ・ 攻撃的、非主張的な生徒にこの意識をもたせる
- ・ GWT、SGEの手法で生徒同士かかわらせながら規範の内面化を意識して指導する

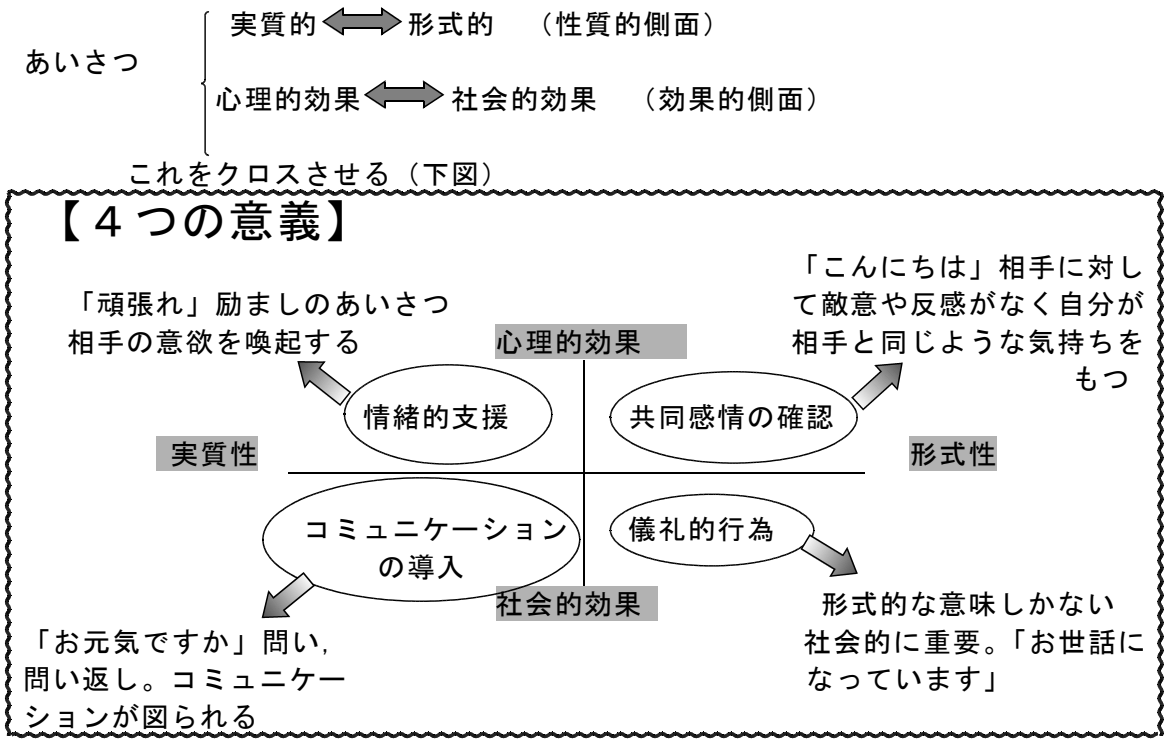
【解説】

「班づくり」をするときに、生徒から不平・不満が出てくることがあります。生徒が納得する話として、次のようなものがあります。

「仲の良い人や気が合う人とは価値観が似ていて話もはずみます。そんな相手は大切にしましょう。なぜなら、自分の考えが深まっていきます。ただ、深まっていくけれど、それだけです。異質な人と付き合うと、話は合わないかもしれないけれど考えが広がっていきます。だから気の合わない人とも付き合しましょう。ただし、気の合わない人とばかり付き合うと、人に合わせるだけの人になってしまいます。そうならないために、気の合う人とも徹底的に付き合しましょう」

攻撃的な生徒は、異質の付き合いを拒否します。非主張的な生徒は、人に合わせてしまいます。そこで、同質・異質の両方と付き合うことの大切さを理解させ、自分の考えを広げ、深めるという意識を生徒にもたせます。そうすれば、誰と同じ班になっても、生徒が納得するようになります。

「あいさつの大切さを教える」



SSTを集会形式で行ったり、学活・道徳・総合で活用する

では、「あいさつができない人」ってどういう人？（生徒に意識づける）

- ・情緒的支援という意義に即せば、励ましたり、共感しようとしなないことから、相手に関心を持たない孤独な人
- ・共同感情に欠け、相手に反感や敵意を持っているか少なくとも相手との関係を拒否している人
- ・コミュニケーションがうまくとれず、儀礼的行動ができないという意味で常識に欠ける人

総じていえば、社会生活が円滑に営めない人

・・・と社会からは判断されてしまう

※多様な体験の機会を与える必要がある（親・教師・地域・企業）

【解説】

あいさつが大切であるということは、どの先生も必ず言うことです。高校の先生に聞いても、就職で採用される生徒は、コミュニケーション能力が高い生徒であり、まじめな生徒よりは、やんちゃでも明るい生徒だといえます。

生徒にあいさつの大切さを納得させるために、軸をつくって4つの領域に分けて説明するとわかりやすいようです。

共同感情の確認：相手に対して敵意や反感がなく、自分が相手と同じような気持ちをもつ
(例)「こんにちは」
情緒的支援：励ましのあいさつ。相手の意欲を喚起する (例)「頑張れ」
儀礼的行為：形式的な意味しかないけれど社会的に重要 (例)「お世話になっています」
コミュニケーションの導入：問いに問い返し。コミュニケーションが図られる
(例)「お元気ですか」

あいさつは場面によって、4つの意義を満たしています。単純に「あいさつ」ですが、いろいろな「あいさつ」の練習を「ソーシャルスキルトレーニング」として行います。

また、あいさつができない人とはどんな人なのかを考えさせることも有効です。「悪い見本」や「逆の見本」は生徒に強い印象を与え、深く学ぶことにつながります。自分ではそう思っていないくても、「あいさつができない人」は、社会から「常識に欠ける人」「孤独な人」などと判断されてしまうということを理解させます。

実践ビデオ：ソーシャルスキルトレーニング『あいさつ』

「さわやかにあいさつ」 デモンストレーション

重枝先生がクラスの生徒と楽しくデモンストレーションをしている場面のビデオを見ました。実際にビデオを見ると、雰囲気がよくわかります。「あいさつ」の大切さについて教師が語るだけではなく、生徒に体験させ、実感させることが、あいさつへの抵抗をなくしていくことになるのです。「実際にやらせてみる」という「インプット」が日常場面でのあいさつ、「アウトプット」につながります。

教師が語るだけではなく、ぜひ生徒に活動させてみましょう。

教室の机を少しよけて、廊下に見立てます。教師と生徒が歩いてきて「あいさつ」をするロールプレイをします。

『黙ってすれ違ふと、どんな気分になった？(生徒の言葉をうけて) そうだね、嫌な気分だね。先生も胸が苦しくなる。何かほしいよね。歩いてきてぶつかると、どうだ？即ケンカになるよね。先にあいさつされると、どんな気分？(生徒の言葉をうけて) 気分がいいよね。どの距離感であいさつすれば安心感を与えられるのかな？この距離だとどう？ちょっとドキドキした。この距離だと？ちょうどいいタイミング！！』

こんな風に、生徒といろいろ試しながら、本音と本音の交流ができると、効果的な「デモンストレーション」になり、全体でロールプレイングをする意欲付けになります。また、明日からどんなあいさつをしようかな？というように、日常場面での意欲付けにもなります。

「あいさつしない人ってどんな人？」生徒と一緒に定義づけするのも効果大です。

ぜひ、チャレンジしてみてください！



「ゼロ・トレランス」

- **ゼロ・トレランス**：校内での行動に関する詳細な罰則を定めておき、これに違反したら例外なく罰を与え、改善が見られない場合は特別な教育施設で指導する。(1997アメリカクリントン大統領)



- ・「罰則主義の行き過ぎ」との批判もあるが、その後成立した「落ちこぼれ防止法」に継承されているように「ダメなものはダメ」と厳しく指導するが「とことん面倒をみる」の理念。

ゼロ・トレランス ・段階的指導の導入

- ・指導基準の周知
- ・生徒の自己指導力の育成
- ・教育相談等を通じて問題行動等の背景や生徒が抱える問題等をきめ細かく把握して対応する



「安全で規律ある学習環境を構築するという明確な目的のもとで、小さな問題行動に対して、学校が指導基準にしたがって、毅然とした態度で対応する理念」

ゼロ・トレランスは「子どもと向き合って、指導規準・基準に従って責任を果たさせ、自律的な生き方を身につけさせること」ということであり、目新しいものではない。

- **プログレッシブディシプリン**（段階的指導）の中でゼロ・トレランスが紹介された。(h18・5「生徒指導体制の在り方についての調査研究」報告書（国立教育政策研究所生徒指導センター）)



大きな問題に発展させないために、小さな問題行動から曖昧にすることなく注意していくには、大きな問題を起こす恐れのある「徴候」を正しく捉える必要がある。

「ハインリッヒの法則」：1つの重大事故の背後には29の軽微な事故があり、その背後には300の小さな徴候がある。

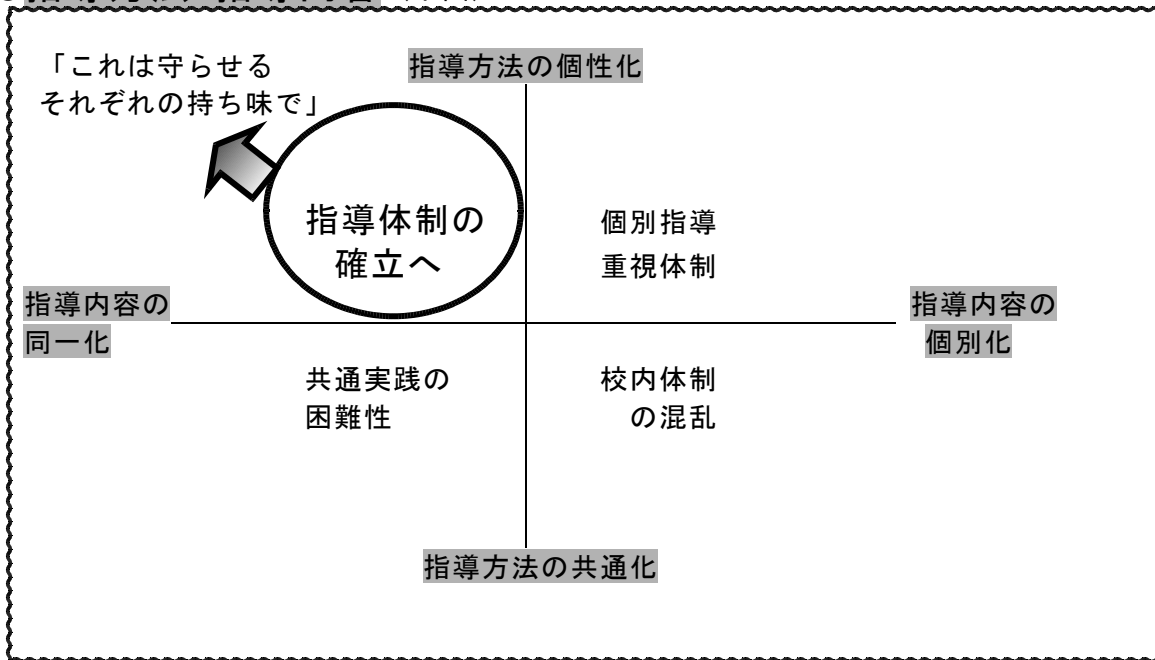
報告書には「教職員がお互いの役割や業務分担を十分理解し、助け合い、創意工夫していこうとする支持的かつ協働的な人間関係が大切」と記されている。

【解説】

高校では、「ゼロ・トレランス」という意識が強くあります。罰則を決めて、停学や退学にするという考え方です。批判もありますが、とことん面倒をみていくという理念をもち、毅然とした態度で生徒指導にあたるというもので、効果を上げています。

「プログレッシブディシプリン」とは、小さなところから注意していけば大きな問題にはつながらないという考え方で、大きな問題を起こす恐れのある「兆候」を正しく捉えることの必要性を説いています。「ハインリッヒの法則」とも共通の考え方で、教職員の役割分担や協力で、学校が大きく崩れるのを予防するというものです。

○指導方法・指導内容（下図）

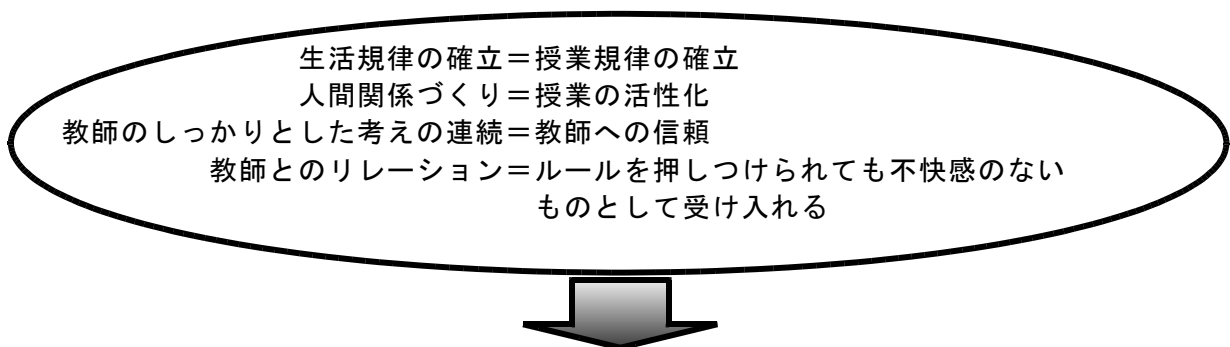


例えば・・・友だちのふでばこを窓から外に投げた生徒に

A先生：「拾ってこい！」（P）その後そっと後を追い、肩を並べて教室に戻りながら「何をカッカしているんだ」と語りかけた。（M）

B先生：「どうしたの？何かムシャクシャしているんだね」（Mから入る）とスキンシップ。「でもふでばこは拾ってきなさい。それと〇〇君にあやまることを忘れてたらダメだよ」（P）責任を取らせることは怠らない。

※「ダメはダメ」のゼロ・トレランスの理念が根底にあれば生徒指導体制の構築の妨げにはならない。



学力保障・向上への基盤となる

【解説】

指導方法と指導内容を図式化した上図では、「左上」が一般的に良い生徒指導といわれます。内容は決めるが、方法はその先生の持ち味でやるというものです。「右下」は、指導内容も指導方法もバラバラです。校内体制が混乱します。「左下」は指導内容も指導方法も同じです。これはカッチリしすぎて、一緒に行うことに困難性があります。

指導内容は統一していても、指導方法が個性化していれば、例えばA先生はPが先で次にM、B先生はMからPというように、自分の持ち味が生かせることになり、教師の負担感やストレスがありません。

実践ビデオ：「ぼくらの先生」

3学期のリレーションとマナーづくりを行うのに最適なGWTです。

エクササイズをしながら教師は、「集団を見る」「生徒の表情を見る」ことで、学級集団の状態や関係性など、さまざまな情報を得ることができます。

生徒側には、3つの気づきを意識させます。

①協力のよさ
②他人のよさ
③自分のよさ

+

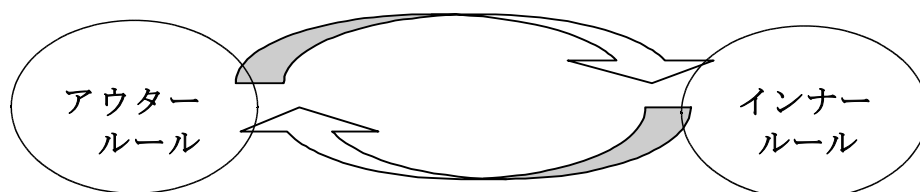
①ルールの暗黙化
②気づきの日常化

・・・当然のようにあたりまえに行う
例えば、先生がしゃべったら黙る
否定しないなど

「アウトプット」の部分

気づいたことを係活動、部活動など何かの場面で、実際に行動させる
そうしないと、「意味のある時間」にならない

また、インナールールとアウタールールのコラボレートを目指します。



コラボレートすることを目指す

心の外の
外的な世界にある
ルール

心の内の
内面的なルール

ビデオを見ると、まずグループのリーダーを集めて重枝先生が指示を出そうとしています。しかし、まわりの生徒が静かに聞いていないと始めないという、しつけも行っていきます。

活動中の生徒の様子は、頭をつき合わせて良い雰囲気です。このような雰囲気は積み重ねによってつくられるのです。教師は、生徒の様子を観察しながら、生徒の新しい一面を見つけることを楽しむ余裕が必要です。生徒のために行っているという感覚ではなく、教師自身も楽しむことができると、クラス全体の雰囲気が大きく変化します。もちろん教師の役割も重要です。グルーピングはどうするか？鉛筆は何本必要か？生徒たちはタイミング良く話しているか？頭の位置はどうか？ワークシートは必要か？振り返りシートはどのレベルを使うか？など、一瞬で判断し、その場に応じて的確な指導を行う力量が、教師には必要なのです。

また、GWTで大切なことは、決まった時間で切ることです。時間内に行うことを徹底させます。教師はそこは譲ってはいけません。これもしつけです。生徒がなるべく早くゾーンに入るようにしつけるのです。時間がいくらでもあると思うと、生徒に緊張感がなくなります。もし解答にたどりつけなかったとしても、次のチャンスがあることで納得させます。それが「積み重ね」です。

大切なのは、「振り返り」です。振り返りによって、協力のよさや他者の良さに気づかせるのです。振り返りシートに名前をはっきりと入れて、他者の良さを書かせます。それを全体に発表させることで、自分の良いところを人から言われる体験ができます。それは、自分の良さに気づくことになります。それを行わないともったいないのです。生徒に発表させて、安心感のある教室をつくるのです。メンバーが変われば、新たな気づきがあります。お互いを否定せ

ずに尊重し、認め合う関係ができてきます。それがリレーションが高まった状態であり、クラスのルールを守らせることにつながります。また、ルールがあるから安心感があり、リレーションも高まるという循環ができます。

ビデオを見て印象的だったことは、安心感に包まれた教室の、教師・生徒共に楽しそうなムードでした。

《情報を組み立てるGWT》

『ぼくらの先生』

〈ねらい〉

- 情報を正確に伝え、「聴く」ことの重要性に気づく。
- 情報を集めたりまとめたりするときに、「協力」が大切であることを学ぶ。
- グループ内のコミュニケーションを深める。

〈準備〉

- ・ 指示書
- ・ メモ用紙（A3白紙）
- ・ 情報カード
- ・ ふりかえりシート

〈進め方〉

- 1 5, 6人のグループに分け、机を囲むように座らせる。
- 2 〈指示書〉〈メモ用紙〉を配り、リーダーに〈指示書〉をしっかりと読ませる。
- 3 次のように説明して、〈情報シート〉をリーダーに配布する。
「これから配るシートは、裏返しにして1人に1枚ずつ配ってください。カードに書かれていることは、自分の言葉で他の人に正しく伝えるようにしてください。他の人に見せたり、とりかえたりしてはいけません。また、他のグループの人とも話さないでください。質問はありますか？」
- 4 エクササイズの実施 「30分くらいかな。終了5分前になったら知らせます。」
- 5 結果確認 「終わったグループから振り返りシートを配布」
- 6 振り返り 「誰がどんなことをしたか、課題解決のために役立ったか」「その後のグループ活動でどんなことに気をつけようと考えているか」などを学級の実態に合わせてどんどん発表させる。
- 7 まとめ

個を見る：表情、態度、しぐさ、声の調子など

個と個を見る：会話、まわりへの影響

個と集団を見る：PとMどのような機能を果たしているか？

- ※P機能（話し合いを進める、意見を出す、結論を出す、役割分担をする）
- M機能（気配り、言い過ぎを押さえる、疲れを和らげる、雰囲気をよくする）

集団を見る：コンテンツとプロセスに着目する。全体の雰囲気はどんな感じか？その雰囲気はどこから発せられているものなのか？

- ※コンテンツ（グループ活動や話し合いをしているときの討議の中身や活動の内容）

プロセス（活動や話し合いをしているときのメンバーに起こっていることがら）

GWT「ぼくらの先生」

《体験活動の解説》

○ゲーム開始

5～6人のグループをつくり、リーダーを決めました。リーダーは重枝先生のところで封筒を受け取り、指示を受けています。メンバーは静かに待っています。リーダーが戻ってくると封筒から紙が配られ、指示が出ました。「これから情報を組み合わせて課題解決を行います。ルールは、自分もっている情報カードは他の人には見せないことと、言葉で正しくグループの人に伝えることです。紙にメモをすることは自由です」

重枝先生の「始め」の合図でゲーム開始です。

○グループで情報交換

さっそく自分の情報シートに書いてあることを伝え合います。一人の先生が、その情報をメモしてくれます。誰かが言った情報につながる内容が書いてあるのを見つけた人は、タイミング良く関連した情報を話します。それがつながっていくと、何が問われているのか、その答は何なのかがわかってきます。良いチームワークです。スムーズに答に近づいていきます。最初は難しく思えた課題でしたが、チームワークの良さで答えがわかりました。みんなで声を合わせて、「できた！」重枝先生を呼びます。「正解！」「やったー！！」拍手ということで、気持ちよく正解できました。

○体験した感想

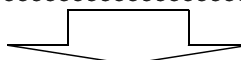
私が参加したグループは、本当にチームワークが良くて、スムーズに正解できたのですが、周りには、正解できず悔しい思いをしたグループもたくさんあったようです。ワークシートに、情報をまとめる枠を書いたものを使うと、20分程度で、白紙なら30分程度で行う内容です。私たちは白紙で行い、時間も30分どころか、10分程度で行いました。それでも正解できたのは、メモをとってくれた方が、上手に情報をまとめて書いてくださったことと、タイミング良く、お互いの内容を関連させながら情報を伝えられたことだと思いました。時間の関係で、振り返りまでは体験できませんでしたが、メモしてくれた先生の大活躍や、タイミング良く情報を伝えられたという良かった面を確認し合う作業は、大人でも満足感を得られるものだと感じます。夢中になって協力して取り組み、他者や自分の良い面に気づけるエクササイズです。自分のクラスでもぜひ行いたいと思えるエクササイズでした。

☆ 今回の学習会のキーワード ☆

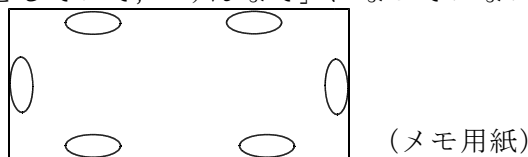
- 自己価値感
- 基底的価値・個人的価値・関係的価値・社会的価値
- 重層的価値
- 見えるテスト・見えないテスト
- 人の成長的領域
- あいさつの4つの意義「情緒的支援」「共同感情の確認」「儀礼的行為」「コミュニケーションの導入」
- ゼロ・トレランス
- プログレッシブディシプリン
- ハインリッヒの法則
- 指導方法・指導内容

♪学習会に参加された先生方の感想♪ (参加人数 31名)

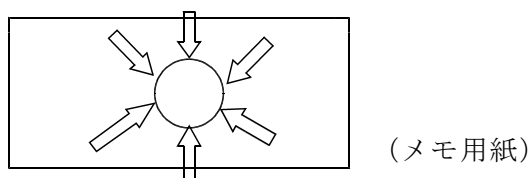
- ・生徒を指導する際どうしても、P（パフォーマンス）だけになりがちで、ただ言うことを聞かせているという指導になっています。しかし、アウトプットあつてのインプットであることを考えると、それだけではいけない、支援的な指導も必要であることを改めて勉強することができました。グループワークトレーニングを実際にすることで、どういうところに目を向けてポイントはどこなのかということが分かりやすく理解できたので、是非高校でも実践してみたいと思います。
- ・高校生という年代にとって、今一番自分が力を注いでいる「人間性」や「社会性」というところにつなげていくために、とても大切な要素をたくさん学ぶことができたと思います。部活動でも授業でも行うことができる内容です。とても「ため」になる学習会でした。
- ・個人的価値、関係的価値、社会的価値の相互関係を知ることで、価値はつながりの中で生まれるということがわかりました。グループエンカウンターを実際に行う中で、ルールとリレーションは両方同時に育てることの必要性を知ることができました。
- ・今日のGWTは時間内にできませんでした。私たちのグループでは、何人かが紙に情報を書いていて、うまくまとめられませんでした。重枝先生が最後に話していた通りだと、本当にそうだなあと実感できました。



GWTで、メモ用紙（白紙の紙）が配られましたが、メモをそれぞれが書くのは良くないのです。一人で解決しようとしていて、「みんなで」になっていないのです。



えんぴつは「一本」だけにして、みんなで解決させることが大切です。



月に1回くらいGWTを取り入れていますが、なかなか日常化できていません。ただのゲームにならないようにしていきたいです。

- ・初めて参加しましたが、「理論と実践」がうまく組み合わされていて、非常に楽しく学べました。「なるほど!」と思えることが多くてびっくりしました。ぜひこれからも継続して参加していきたいです。
- ・学級づくり、集団づくりをしていくうえで、日頃から意図的に仕組んでいくことについて示唆をいただきました。例えば、時間で切る（ゾーンに入らせる）こと、否定的な発言をさせないことなどは、自分も取り組んでいこうと思いました。一生、生かせそうな理論、実践について学べるので、とても有り難いです。
- ・実際にGWTをやってみると、できなくて焦ったり、どうすればいいか迷ったりして、生徒の気持ちが手に取るようにわかるので、いつも楽しみにしています。生徒は完成を目標にしがちですが、何のためにやるのかというところを教師が語っていかなければならないと改めて感じました。